

途上国・ロシア中東欧諸国の将来枠組みにおける役割

2004年9月3日

国際戦略専門委員会発表資料

東北大学東北アジア研究センター

明日香壽川

内容

1. 途上国の「参加」とは？
2. 途上国の主張と提案
3. 途上国間の衡平性（役割分担）
4. 中国の最近の動き
5. ロシア中東欧諸国の最近の動き
6. 今後の課題

1. 途上国の「参加」とは？

1. 途上国の「参加」とは？

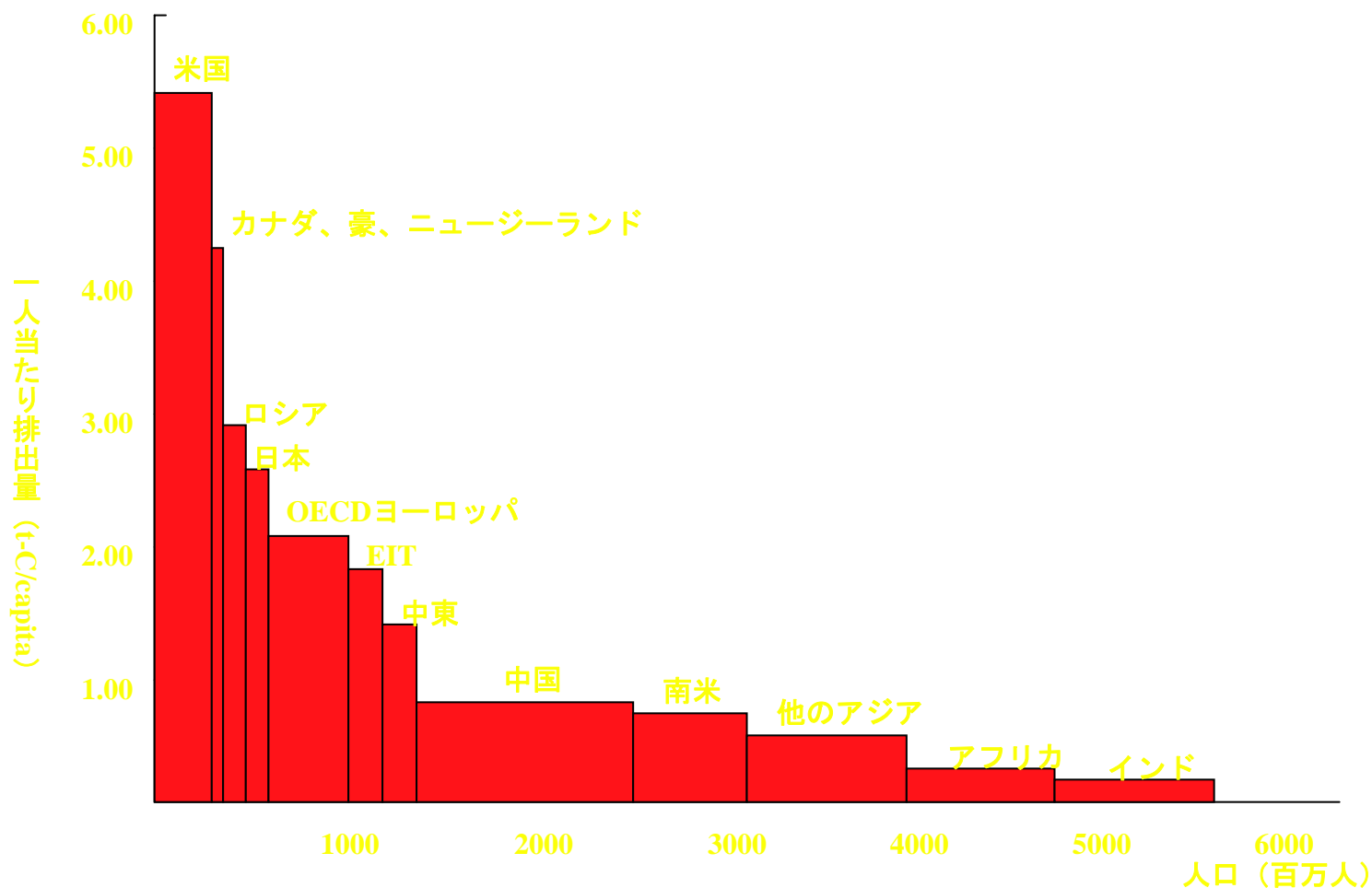
大原則に対する解釈が異なっている

*共通だが差異のある責任及び各国の能力に応じて
In accordance with their common but differentiated
responsibilities and respective capabilities (FCCC
Art.3)*

- “common” に重きを置くか、
“differentiated” に重きを置くか
- “respective capability” を respect するか

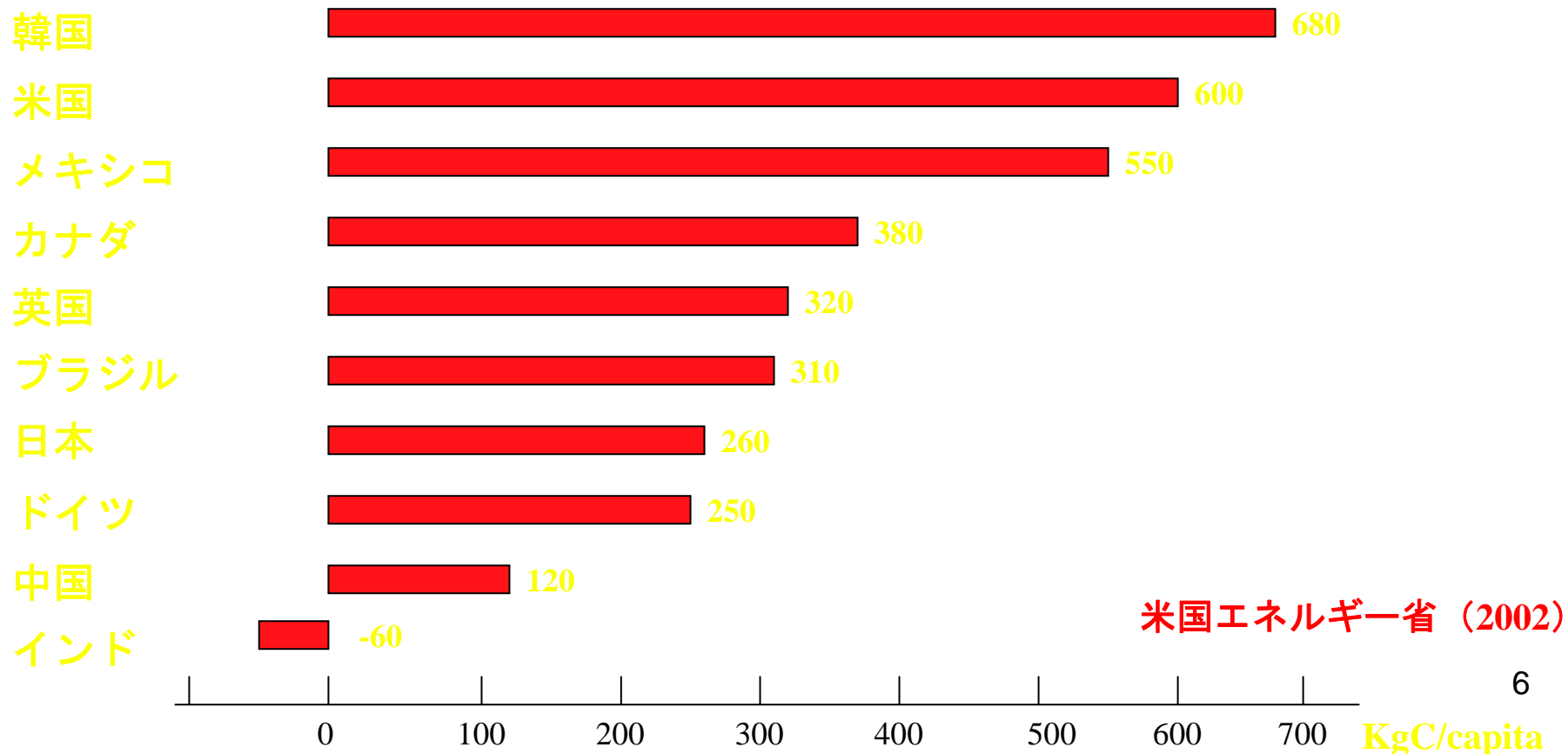
1. 途上国の「参加」とは？

一人あたり排出量と国別排出量は、やはり違うもの



1. 途上国の「参加」とは？

2000-2020年の一人あたり排出量の伸びも先進国の方が大きい



1. 途上国の「参加」とは？

「参加」が必要である理由として何点が挙げられているが...

- 環境保全上の実効性
- Leakage
- 経済効率性
- 規範

1. 途上国の「参加」とは？

途上国「参加」問題には様々な側面がある

- 多様な背景を持つ134ヶ国を一まとめにして議論することの問題
- 責任（Liability）問題との関連
- 米国「参加」問題との混同
- 国際競争力低下への懸念（対中国）
- パンドラの箱としての戦略的利用



2. 途上国の主張および提案

2. 途上国の主張および提案

基本的に堅い...だが皆が同じ考えを持つのではない

- G77及び中国: “京都以後について話すことは全くばかっている”
(COP8での途上国代表としてのベネズエラ代表の発言)
- 中国: 共通だが差異のある責任、適応、ボトムアップ型
- OPEC: 途上国に対するコミットメントは認めない、気候変動の影響や気候変動対策をとることによる影響の最小化と補償
- ブラジル: 温室効果ガス排出の歴史的責任
- インド: 食糧及び栄養の確保が最優先
- AOSIS (小島嶼国連合): 京都議定書の目標の遵守、全ての国が対策を講じる必要がある
- 最貧国 (LDC): 適応を重視
- 韓国、メキシコ (EIG): 全ての附属書 I 国の参加

2. 途上国の主張および提案

基本的には、**衡平性 (Equity)**、**信賴**、**資金**、**技術**

途上国の主な主張・提案

- 「資源のEquitableな分配問題」であることの明確化
- 先進国による京都議定書目標の順守
- 開発を優先
- 適応措置を重視（適応議定書、災害救援ファンド）
- 技術移転（知的所有権の適用除外）
- 能力構築（キャパシティ・ビルディング）
- CDMの改善

2. 途上国の主張および提案 カーボンドেvelopment (CDM) の改善は不可欠

CDMの設立自体は大きな意義があったものの...

- ・ 低迷するCER価格（コスト・フリーなホット・エアーとの競合）
- ・ HFC、N₂O案件の出現（特に韓国）
- ・ EU排出量取引制度がなかったらCDMへの投資は大幅減

改善案としては...

セクター別CDM、CERO（CER Obligation：量、地域、価格、質）、JIや国際排出量取引に対する課税

需要がなければCDMは機能しないため、先進国の数値目標は不可欠



3. 途上国間の衡平性（役割分担）

3. 途上国間の衡平性（役割分担）

役割分担の必要性に対する認識は途上国においても生まれつつある

途上国間の衡平性の確保の例（先進国も含みうる）

衡平性の原則の優先順位：

基本的な生活レベルの確保（needs） > 経済的負担対応力（capability） > 排出責任（responsibility） > 排出既得権（sovereignty/acquired right）

具体的な指標の代表例：

一人あたりGDP（PPP換算）と一人あたり排出量の組み合わせなどを指標にして**閾値（卒業指数）**を決める

3. 途上国間の衡平性（役割分担）

例えば、マルチステージ・アプローチ
（オランダ RIVM）は...

各ステージの閾値（卒業指数）に達したら、次のステージに進む

- 第一ステージ：定量的な削減（抑制）義務なし
- 第二ステージ：排出強度（CO₂/GDP）目標
- 第三ステージ：排出量安定化
- 第四ステージ：排出削減（一人あたり排出量で差異化）

途上国間の差異化の方法選定は、先進国の削減量決定にも直結する

3. 途上国間の衡平性（役割分担）

途上国間を差異化するための必要条件

途上国の中にある以下の認識を踏まえるべき

1. 交渉グループとしての力を維持するために、UNFCCCのもとでのマルチラテラルな枠組みが必要（アルゼンチンの教訓）
2. 1) 中国・インドが準備する時間を持つ、2) 排出量取引による資金移転額を把握可能なものにする、などのために衡平性の原則と中長期目標に基づいた合理的分配（rational and systematic）が必要

3. 途上国間の衡平性（役割分担）

中国・インドが注目されるものの、「一人あたり排出量/所得」の高い国にも注目すべき

- 韓国
- メキシコ
- ブラジル
- 中東・トルコ



4. 中国の最近の動き

4. 中国の最近の動き

温暖化のリスクは実感、明確なシグナル
(政府 & 市場) と時間が必要との認識

- 自然災害 (洪水、ハリケーン)
- 電力不足 (発電設備増設ラッシュ)
- 石炭依存 (炭鉱事故)
- エネルギー安全保障
- WTO (企業の進出)

4. 中国の最近の動き

排出強度（GDPあたりCO₂排出量）の更なる低減の必要性やプレッシャーは認識

- 先進国と比較して中国のGDPあたりCO₂排出量はまだ大きく、それが中国バッシングの一因となっていると自己分析
- それでも、GDPあたりCO₂排出量1990年～2001年で52%低下
- 米国エネルギー省の予測は、2020年で48（t-C/百万人民元）と予測、一方、中国政府は、38、49、56と3つのシナリオを予測
- 2020年までにGDP4倍増が国家目標

4. 中国の最近の動き

CDMへの期待は大きくなりつつある

- CDM管理法公布、ホームページ開設
(<http://cdm.ccchina.gov.cn/>)
- 世銀PCF（プロトタイプ炭素基金）との大型取引
- HFC案件に関するワークショップの開催
- インドに対する対抗心（?）
- 価格に対する政府介入



5. ロシア中東欧諸国の最近の動き

5. ロシア中東欧諸国の最近の動き

ロシアの議定書批准に対しては戦略的な働きかけが不可欠

- 温暖化問題を経済問題として捉えている
- 批准引き延ばしが経済合理的
- イシュー・リンケージ（EUと米国を両天秤）
- ホット・エアー戦略（タイミング、価格、量、JI投資/化石燃料輸出とのトレード・オフ関係）
- インベントリー問題
- 大ロシア主義（国連、米国への不信）

5. ロシア中東欧諸国の最近の動き

中東欧諸国はEUおよびEU排出量取引制度への融合が始まりつつある

- 高排出強度構造（GDPあたりCO₂排出量が高い構造）の改善
- CDMとの競争
- 途上国とのトレード・オフ関係



6. 今後の課題

6. 今後の課題

「原則」「合理」「妥協」「組み合わせ」
「プレッシャー」

- 中長期目標の設定（温度or濃度）
- （対先進国）ホット・エアー付与の原則的禁止
- 卒業指数の設定
- 様々な枠組み案やアイデアの組み合わせ
- 国際競争力低下の懸念への配慮
- CDMの改善
- 「正式非参加国」への政治・経済・倫理的プレッシャー